

# 芥川「西方の人」の「詩的正義」について

兼 武 進

## 一

芥川龍之介の「西方の人」および「続西方の人」のなかに「詩的正義」といふ言葉が三度出てくる。そしてこの言葉はオスカー・ワイルドのいはゆる『獄中記』に出てゐるものであることがしばしば言及される。単に事実として指摘されることもあれば、一步を進めて、芥川はワイルドのその作品から影響を受けたと判断されることもある。

芥川自身が「西方の人」のなかで、イエス・キリストについて「ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を発見したのは当り前である」(18 クリスト教)(1)と断定し、ひとつ置いての断章(20)では「クリストはこの神の為に——詩的正義の為に戦ひつづけた」と付言してゐる。「ロマン主義者の第一人」にしろ「詩的正義」にしろ、ともに『獄中記』のなかにある表現なのであつてみれば、この「詩的正義」といふ言葉もワイルドとなんらかのかかはりをもつと見るのはごく

自然であらう。

しかし、その一方で、わたくしは、芥川の使つてゐる「詩的正義」といふ言葉になにか落着かないものを感じてきた。芥川の「詩的正義」の概念はワイルドのそれとは違ふのではないか、そもそも一般に理解されてゐる意味とも違ふのではないかと。

三十七の断章からなる「西方の人」は昭和二年七月一〇日に脱稿された。しかし、雑誌の締切を凌いで「多少の閑」のできた今、「もう一度わたしのキリストを描き加へたい」と芥川は思つた。「誰もわたしの書いたものなどに、——殊にキリストを描いたものなどに興味を感じるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるキリストの姿を感じてゐる。わたしのキリストを書き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない」(続一)さうして書かれたのが、二十二の断章をもつ「続西方の人」である。脱稿は同月二三日となつてゐる。この後、午前一時ごろ、敬愛する伯母に知人宛ての短冊「自嘲。水漬や鼻の先だけ暮れ

残る」を託し、二四日未明、遺書を胸に自裁した。枕許には聖書が置かれてゐたといふ。

したがつて、「西方の人」と「続西方の人」は芥川最後の作品である。もしわたくしの受けた印象が正しくて、芥川の「詩的正義」には芥川だけの意味合ひも籠められてゐるとすれば、その意味の「ずれ」のなかから、死に逝かんとする芥川の真率な声が響いてくるのではないかと思はれるのである。

勿論、「西方の人」も「続西方の人」も難解なテキストである。一言一句、隅々まで正確な理解を期すのは困難、といふより、少くともわたくしには不可能である。小論ではただ、「詩的正義」といふ言葉を通じて芥川のどのような位相が見えてくるかについて考察を試みたいと思つてゐる。

## 二

まづ、芥川が「詩的正義」といふ言葉をいかなる意味において用ゐてゐるかを見てみよう。

この言葉は「西方の人」のなかにつぎのやうに現れる。少し長くなるが、断章の冒頭から三分の二ほどを引用する。

クリストの度たび説いたのは勿論天上の神である。「我々を造つたものは神ではない、神こそわれわれの造つたものである。」

——かう云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせ

るであらう。それは我々の腰に垂れた鎖を截<sup>き</sup>りはなす言葉である。が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。

のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神経系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。クリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう。(神に会はなかつたクリストの悪魔に会つたことは考へられない。)彼の神も亦あらゆる神のやうに社会的色彩の強いものである。しかし兎に角我々と共に生れた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこの神の為に——詩的正義の為に戦ひつづけた。あらゆる彼の逆説はそこに源を発してゐる。後代の神学はそれ等の逆説を最も詩の外に解釈しようとした。それから、——誰も読んだことのない、退屈な無数の本を残した。(20)

この断章のなかに「詩的正義」の意味を説明する箇所はない。わづかに「詩的正義」と「神」とが等しいものとされてゐるだけである。そしてその「神」は「我々と共に生れた」、つまり、ひとりの人間が自立した人間としての意識をもちはじめたときにはじめて、「神」は「神経系統」のなかに意識されるやうになる。そして、そのやうな「神」は、クリストの神であれだれの神であれ、社会との関係のなかで生れてくるものである。

「詩的正義」の意味を把握するうへで注目すべきなのは、「詩」と

いふ言葉の使はれ方である。「後代の神学」が「退屈な無数の本」を生んだのは、「詩的正義の為に戦ひつづけた」クリストの逆説を「最も詩の外に解釈しようとした」からだ、と芥川はいふ。それならば、「詩」は「正義」から独立した概念として措定されてゐることになる。では、芥川のいふ「詩」とはなにか。「西方の人」、「続西方の人」の随所に「詩」あるいは「詩人」といふ言葉が散見されるが、それらの意味を解するためには、あらかじめ、芥川がクリストをどのやうに理解してゐたかを把握しておく必要がある。

芥川によれば、クリストはマリアと聖霊の子である。「マリアは唯の女人だつた。が、或夜聖霊に感じて忽ちクリストを生み落した」(2)のだつた。マリアは「永遠に女性なるもの」ではなく、「永遠に守らんとするもの」であり、「世間智と愚と美德」(2)とがひとつになつたものである。これにたいして、聖霊は、かならずしも「聖なるもの」ではなく、「永遠に超えんとするもの」であり、「善悪の彼岸」(3)に動いてゐるものである。クリストがマリアと聖霊の子であるといふことは、クリストのうちに、「世間智と愚と美德」からなる現実に執着する保守的要素と、その現実を「永遠に超えんとする」超越的意志とが共存してゐるといふことである。ただし、「母のマリアよりも父の聖霊の支配」(36)のほうが強くて、そのことが「彼の十字架の上の悲劇」(36)を招来することになつた。マリアは人生を、聖霊は「天国」を目指す意志を象徴してゐて、芥川のいふ「あらゆるクリストたち」(3)とは、この聖霊の啓示を受けて、人生を

超越し「天国」を希求する天才たちの謂ひである。したがつてクリストはひとりではなかつた。イエス・クリストの前にもゐたし、後にもまたゐた。

このやうな天才たちが「天国」の眞実や「天国」に至る道をわれわれの日常の言葉で表現したときに「詩」が生れた、と芥川はいふ。あるいはまた、そのやうな言葉を発した天才を「詩人」と称してゐる。以下にいくつか例を挙げる。

クリストは彼の詩の中にどの位情熱を感じてゐたであらう。  
「山上の教へ」は二十何歳かの彼の感激に満ちた産物である。  
(14)

我々は唯我々自身に近いものの外は見ることが出来ない。少くとも我々に迫つて来るものは我々自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジャアナリストのやうにこの事実を直覚してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人——彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずには済ましたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の帰宅」はかう云ふ彼の詩の傑作である。(19)

「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」  
それはもう情熱に燃えた青年クリストの言葉ではない。彼に復

譬し出した人生に対する（彼は勿論人生よりも天国を重んじた詩人だつた）老成人クリストの言葉である。（28）

これらはいづれも、現実<sup>じつ</sup>に沈淪せず「天国」を目指す天才の言葉や姿勢を「詩」あるいは「詩人」と表現してゐる例である。おそらくそのやうな表現の精華といへるのがつぎの箇所である。ここはワイルドの影響があると指摘されるところでもある。

クリスト教はクリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い詩的宗教である。彼は彼の天才の為に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を発見したのは当り前である。彼の教へた所によれば、「ソロモンの栄華の極みの時だにその装ひ」は風に吹かれる一本の百合の花に若かなかつた。彼の道は唯詩<sup>ただ</sup>的に——あすの日を思ひ煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる。何の為に？——それは勿論ユダヤ人たちの天国にはひる為に違ひなかつた。（18）

要するに、「永遠に超えんとする」意志が開示した真実の表現が「詩」なのである。その意志を突き動す「聖霊」はかならずしも「聖なるもの」ではないゆゑに、開示された真実もかならずしも「聖なるもの」ではない。「神」とともに「細かい神経系統」のなかに住み、「善悪の彼岸」を歩く「聖霊」は、「聖なるもの」どころか道德的な

概念でさへない<sup>(2)</sup>。「西方の人」「続西方の人」のどこにも「正義」についての言及が見られないのも、おそらくそのためであらう。かくて、芥川のいふ「詩的正義」とは、「永遠に超えんとする」意志の目指す目標、価値あるものといふほどの意味しか持つてゐないとわたくしには思はれる。

なほ、つぎの箇所なども、「詩」の意味は同様に理解することができ、またすべきであると思はれる。

大勢の女人たちはクリストを愛した。就中マгдаラのマリアなどは一度彼に会つた為に七つの悪鬼に攻められるのを忘れ、彼女の職業を超越した詩的恋愛さへ感じ出した。クリストの命の終つた後、彼女のまつ先に彼を見たのはかう云ふ恋愛の力である。クリストも亦大勢の女人たちを、——就中マгдаラのマリアを愛した。彼等の詩的恋愛は未だに燕子花<sup>かきつばた</sup>のやうに匂やかである。クリストは度たび彼女を見ることに彼の寂しさを慰めたであらう。後代は、——或は後代の男子たちは彼等の詩的恋愛に冷淡だつた。（尤も芸術的主題以外には）しかし後代の女人たちはいつもこのマリアを嫉妬してゐた。（15）

この「詩的恋愛」はプラトニック・ラブと解するのが通例のやうである。たしかにそのやうな解釈を受入れる一種叙情的な雰囲気<sup>ふんいき</sup>が漂つてゐるのは確かだが、しかしそれだけではこの挿話の意義は解

き明かせないだらう。マグダラのマリアは売笑婦であつたが、クリストの癒しを受けて弟子となつた。そればかりか、クリストの十字架上の死を見守り、復活のクリストにもだれよりも先に会つたのである。「度たび彼女を見ることに彼の寂しさを慰め」るくらゐはプラトニック・ラブでもできるであらうが、復活の最初の目撃者となるには、マグダラのマリア自身にも「彼女の職業」すなはち人生の現実を超越して、「天国」を希求する強い意志がなければならなかつたはずである。

### 三

一方、オスカー・ワイルドは「詩的正義」をどのやうな意味に使つてゐるか。『獄中記』のなかにつぎのやうな文章がある。

彼の徳性は共感そのものである。徳性はまことにかくあるべきである。たとへ彼が、「この女の罪はゆるされたり。その愛すること大いなればなり。」といふ言葉のほかは何も言はなかつたとしても、それをいふだけでも死んでもいいほどの価値がある。彼の正義はすべて詩的正義である。正義はかくあるべきである。乞食は天国にゆく。ただ彼が不幸だつたからだ。彼が天に送られる理由としてこれ以上のものをみることは私には出来ない。日没の涼気のうちに、一時間だけ葡萄園で働く者が、一日中そこで炎熱の下に労苦するものと全く同じ報償を受ける。それが

どうして悪いのか。人はみな何物をも貰ふ価値がないのかも知れないのだ<sup>(3)</sup>。

ワイルドの場合にも「詩的正義」の意味を直接に説明する箇所はない。この言葉が英語で本来もつてゐる意義はしばらく措くとして、ワイルドが使つてゐる意味を理解する手掛りは、ここに聖書から引かれてゐるふたつの挿話にある。

まづ「乞食」の譬へだが、これは「ルカ伝」第十六章の「貧しき者」ラザロの話とされる<sup>(4)</sup>。ラザロは死ぬと、御使ひたちに連れられてアブラハムの懷つまり天国に入る。ところが、「富める人」は死ぬと黄泉に落ちた。そして苦悩のなから天を仰ぐと、遙かにアブラハムとその懷にゐるラザロの姿が見える。必死に救ひを求める「富める人」に向つて、アブラハムは「なんぢは生ける間、なんぢの善き物を受け、ラザロは悪しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり」と答へる。この地上において物質的に恵まれなかつたといふ、ただそれだけの理由で、死後は天国に受入れられる。

つぎに、「葡萄園」の譬へは「マタイ伝」第二十章に出てゐる。葡萄園で働いた者たちに、夕方になつて主人が賃金を払ふ。ところが、午後五時ごろになつて一番遅れて働きた者から支払ひが行はれ、あまつさへ、朝早くから一日中、暑さの中で働いた者も、午後五時からわづか一時間だけ働いた者も、賃金は等しく一デナリだつ

た。不平をいふ者どもに向つて、葡萄園の主人は「我なんぢらに不正をなさず、汝は我と一デナリの約束をせしにあらずや。……この後の者に汝とひとしく与ふるは、我が意なり。わが物を我が意のままに為るは可からずや、我よきが故に汝の目あしきか」と答へる。天国はちやうどこのやうなもので、「後なる者は先に、先なる者は後になるべし」といふのがクリストの教へである。

このふたつの挿話はいづれも神の国における価値の逆転を教へるものといへやう。そのことを裏打ちするやうな文章が、『獄中記』には、この引用の少し前にある。

もし愛が投げかけられるならば、自分は全く愛を受けるに値しないものと感ずべきである。何人といへども愛を受けるにふさはしいものではない。神が人を愛するといふ事實は、理想界の神聖な秩序の中にあつては、永劫の愛は永劫に無価値なものに投げあたへられると定められてゐることを示すのである<sup>(5)</sup>。

「永劫の愛は永劫に無価値なものに投げあたへられる」といふのがまさに価値の逆転である。しかし、さらに重要と思はれるのは、「何人といへども愛を受けるにふさはしいものではない」といふ言葉である。これは先の引用の最後にあつた「人はみな何物をも貰ふ価値がないのかも知れないのだ」に照応してゐるが、そのいはんとするところは、人間には本来、価値の逆転どころか、価値そのものを

云々する資格さへない、といふことであらう。さうして、この引用のなかにある「理想界の神聖な秩序」といふ表現が、ほかならぬ、先の引用の中の「詩的正義」に相当することにも気づく。

ところで、「詩的正義 (poetical justice)」とはなにか。『オックスフォード英語辞典』によれば、「詩的正義」とは「報奨や懲罰の配分における理想的な正義で、詩など、想像力がつくりだす作品の世界にふさはしいもの」であり、ここにいふ「正義」とは「権威や権力を行使して、公正や公平さを維持すること」である<sup>(6)</sup>。簡単にいへば、詩などの文学作品において、最終的には善や徳が報はれ、悪徳が懲らしめを受けて、正邪の公平が守られること、である。

この定義をワイルドの「詩的正義」に当て嵌めると、どういふことになるか。「乞食」の譬へ話の場合、この地上においてこそ物質的に「貧しき者」であつたが、まさにそのために、天国においては靈的に「富める者」となる。「まことに汝らに告ぐ、富める者の天国に入るは難し。復<sup>また</sup>なんぢらに告ぐ、富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し」(「マタイ伝」第十九章)なのである。そしてそのすぐ後、第二十章に、ワイルドが引いてゐる「葡萄園」の譬へ話が出てくる。つまり、この地上で「後の者」のはうがこの地上で「先の者」よりも先に報はれる。「理想界の神聖な秩序」は維持されてゐるのであり、その意味で、ワイルドの「詩的正義」は大筋において英語の慣用にも聖書の解釈にも適つたものといふことができる。

ところで、ワイルドは獄中にあつて、「最近クリストをうたつた四つの散文詩を根気よく学んでゐる」<sup>(7)</sup>と書いてゐる。ギリシャ語の聖書を手に入れることができたので、毎朝、独房の掃除などをすませた後、四つの福音書を少しづつ、手当り次第に読んだのだつた。さういふワイルドにとつて、クリストは「浪漫主義的傾向」を代表する者であり、「詩人」であり、そのうへ、生涯そのものが一篇の「詩」であつた。

クリストに於いてわれわれは単に人生の古典主義的傾向と浪漫主義的傾向とを真に峻別する根拠となるもの、すなはち個性と完璧との緊密な結合を見出すばかりではない。その資質の底にあるものは芸術家の資性とことならぬもの、——強烈な炎のやうな想像力であつた。彼は人間関係のあらゆる隅々にまで、芸術界に於ては創造の唯一の秘密となるところの想像力による同情を体现した<sup>(8)</sup>。

クリストはもともと詩人の仲間に入るべきである。彼の人間観のすべては紛れもなく想像の力から湧き出たものであり、それによつてのみ至り得るものである<sup>(9)</sup>。

再びいふが、クリストは詩人の仲間である。これは真実のことだ。シェリー、ソフォクレスは彼の仲間だ。しかし、彼の全

生涯こそもつとも驚くべき詩篇である<sup>(10)</sup>。

クリストをこのロマンスの躍動の中心とするのは、彼自身の稟質のうちの想像力にほかならぬ。詩劇、歌謡などの奇しき人物は他人の想像によつてつくられるが、ナザレのイエスはおのれの想像の力によつてわれとわが身を創造した<sup>(11)</sup>。

かうして並べてみると、ワイルドの詩人クリスト観の要にあるのが「想像力」であることが歴然とする。クリストは想像力によつて人間を理解し、救済したばかりではなく、みづからの人生をも創造し、完成したのだ。「クリストの想像とは愛の一形式にほかならぬ<sup>(12)</sup>」や「俗物の道は実に想像の光に恵まれぬ人性の半面<sup>(13)</sup>」といふ言葉にも明らかなやうに、「想像力」によつて認識され、実現された世界はいはば「愛」の世界であり、逆に「想像力」によつて照されない世界は「俗物の道」なのである。

#### 四

このやうに見てくると、芥川とワイルドのクリスト観にはたしかに同質の認識のあることがわかる。その最たるものは、クリストを詩人と観じる点である。

芥川のクリストは、「世間智と愚と美德」の象徴であるマリアへの叛逆を試み、聖霊の力によつてそれを超越して、神の国を目指した。

そのキリストが「永遠に超えんとする」生の姿と真実を、「我々自身に近いもの」を譬喩として語ることによつてわたくしたちに伝へてゐるのがキリストの「詩」であり、したがつてキリストは「詩人」なのである。一方、ワイルドのキリストは、「思想に触れることの出来ぬ鈍重さ、遲鈍な尊大の風、退屈な正統主義、世俗的成功の崇拜、粗雑な物質的生活への完全な没頭、自己と自己の重要さについての滑稽な自信<sup>(14)</sup>」を特徴とする俗物主義を輕蔑し、稟質として恵まれた想像力によつて浪漫的な自由な生を謳歌して、わたしたちに神の國への道を指し示した。想像力によつて俗物の世界を乗り越えようとするのはまさに浪漫的芸術の特質であり、さういふ意味でキリストは「詩人」であり、キリストの教へは「詩」となるのである。そして、芥川のキリストもワイルドのキリストとともに、俗物主義を超越することをとほして自分自身を創造していつたのだった。

しかしながら、同じく俗物主義を超越するといひながら、芥川とワイルドのキリスト像には大きな逕庭のあることも見逃されてはならない。それは、超越の様相の相違といつてよいだらう。

芥川のキリストは俗物主義を超越するのであるが、しかし完全に超越してゐたといふことはできない。「キリストは彼自身に、——彼自身の中のマリアに叛逆してゐる。それはバラバの叛逆よりも更に根本的な叛逆だつた」(31)といふ表現が窺はせるやうに、マリア的なるものはつひにキリスト自身の中から消えることはなかつたのである。とすれば、そのキリストが超越によつて神の國を目指せば目

指すほど、キリストは自分自身を、少くとも自分自身の一部を、それだけ激しく否定する結果にならざるを得ない。

しかしキリスト自身も亦時々マリアを憐んだであらう。かがやかしい天国の門を見ずにありのままのイエエルサレムを眺めた時には。……(17)

キリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懷しさを感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも応でも人氣のない天に向つてゐる。彼の誕生を告げた星は——或は彼を生んだ精霊は彼に平和を与へようとしな。い。(25)

ここには、聖靈によつて悲劇へと宿命づけられたキリストが、超越すなはち自己否定の道の途上で密かに漏らす、いはば望郷の溜息が聞こえる。イカルの悲歌とでもいへうか。芥川は「彼は母のマリアよりも父の聖靈の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は実にそこに存してゐる」(36)といつてゐるが、「そこ」とは、裏返していへば、キリストの中からつひにマリアの痕跡が消えなかつたことを指してゐるのである。さうしてまた、

平和に至る道は何びともキリストよりもマリアに学ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人で

ある。(続11)

クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず変化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまゝ。……

(36)

と芥川がいふとき、これはもうクリストの敗北宣言以外のなにものでもない。現世を超越しようとして果せず、つひに平和を得られなかつた芥川のクリストの雨に濡れそぼつた姿は、悲惨としかいひやうがない。

これに比べれば、ワイルドのクリストははるかに幸福感に満ちてゐる。「芸術生活とは自己発展のほかにはない<sup>(45)</sup>」し、「浪漫主義的傾向」の「詩人」であるクリストには「個性と完璧の緊密な結合」が見られる。自己の内面において矛盾する志向がせめぎ合ふなどといふ悲劇はあり得ないのである。

われわれはクリストをおもふとき、何処かで彼が自ら描いたやうに、いつも友に護られた若い花婿の姿をおもふのだ。また、緑の野と清冽な水をもとめて谷間に羊群をつれて逍遙ふ羊飼ひを、音楽の力で神の市の壁を築かうとする楽師を、全世界もそ

の愛に對してはあまりにも小さかつたほどにも人を愛する人をおもふのだ。私にとつては、彼の奇蹟は春の訪れのやうにめでたく、また自然でもある。あれほどの人柄の魅力を考へるとき、その奇蹟の数々を信ずるのに何の難さがあらうか。彼を一目みれば悩む者の心に平和は訪れたであらう<sup>(46)</sup>。

ここには、自足して、つまり自己のうちにいかなる相剋もなく、このうへなく幸せなクリストの姿が描かれてゐる。「いつも友に護られた若い花婿」は、芥川の「嫌でも応でも人氣のない天に向」はうとするクリストとは似ても似つかない。また、芥川のクリスト自身にさへ「彼を生んだ精霊は平和を与へようとしな<sup>(47)</sup>い」と対照的に、ワイルドのクリストは自分だけでなく、悩む者も彼を一目みれば心に平和が訪れるほどに、平和なのだつた。

ワイルドの「詩的正義」はこのやうな至福をもたらすものであり、ワイルドのクリストは「詩的正義」の世界でのびやかに幸福と平和を満喫してゐる。それにひきかへ、芥川のクリストは「詩的正義」のために、おそらく寧日もなく、「戦ひつづけた」のだつた。さらには、芥川の「詩的正義」が信仰や道德の世界のものではなく、「善悪の彼岸」の「神経」の世界のものであつたことを考へるとき、芥川の理解が通常の「詩的正義」の道德的意味から著しく逸脱してゐることも今さら指摘するまでもあるまい。

先に「西方の人」から引用した箇所をもう一度引用する。

クリスト教はクリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い詩的宗教である。彼は彼の天才の為に人生さへ笑つて投げ棄ててしまった。ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を発見したのは当り前である。(18)

芥川のいふ「ロマン主義者」とワイルドの「浪漫的運動の先駆<sup>(17)</sup>」との相違は今や覆ふべくもない。雨のなか、「神経」の苦悩にうなだれてゐる芥川のクリストそして、燦々たる陽光のなかに笑みを溢れさせてゐるワイルドのクリスト——なんといふ違ひであらう。

この対照についてはわたくしは以前にも指摘したことがあるが<sup>(18)</sup>、同じことは「詩的正義」についてもいへる。芥川の「詩的正義」とはおそらく研ぎすまされた神経の極限であり、これに対してワイルドの「詩的正義」は、現実の苦難を一挙に反転させる道徳的善ないしは至福なのである。おそらく芥川は「西方の人」と「続西方の人」を書くにあたつて、ワイルドの『獄中記』を読みかへすことはなかつたのではないか、といふのが、確証はないけれども、わたくしの想定である。かつて読んだときの記憶が長い時間の経過のなかで変容し、それがそのままここに露出してきたといふのが真相ではないかと思ふ。

ところで、ワイルドの『獄中記』をめぐつては、周知の逸話があるのである。芥川が読んだ『獄中記』は、いふまでもなく、ロバー

ト・ロスが編集した一九〇五年刊の簡略版であるが、そこから読み取れるワイルド像から実際のワイルドがいかに隔つてゐたかは、紆余曲折を経た後、一九六二年にルーパト・ハートIIデイヴィス社から『オスカー・ワイルド書簡集』が刊行されて白日のもとにさらけ出された。そこに含まれる完本『獄中記』からひとつだけ例を挙げよう。

もし愛が投げかけられるならば、自分は全く愛を受けるに値しないものと感ずべきである。何人といへども愛を受けるにふさはしいものではない。神が人を愛するといふ事実は、理想界の神聖な秩序の中にあつては、永劫の愛は永劫に無価値なものに投げあたへられると定められてゐることを示すのである。

これは前に引用したもののだが、この後、一九〇五年版ではつぎのやうにつづく。

いや、もしこの言葉が辛辣にすぎて耐へがたいとすれば、かうも言ひかへてもよからう。——自ら愛に値すると自惚れるものを除けば万人は愛を受ける価値があるのだ、と。愛は聖餐であつて跪いて受くべきもの、受ける人の唇と心奥には、「主よ、われは高きものにあらず」の言葉がひびくべきものである。

ここを読む者はだれしも、下獄して「絶対の謙抑<sup>(1)</sup>」の美德を学んだワイルドの真摯な改悛の姿勢に感銘を受けるであらう。では、この箇所が一九六二年版ではどうなつてゐるか。阿部知二訳の文体にならつて訳を補ふと、かうなる。補つた部分には傍点を付す。

いや、もしこの言葉が君には、辛辣にすぎて耐へがたいとすれば、かうも言ひかへてもよからう。——自ら愛に値すると自惚れるものを除けば万人は愛を受ける価値があるのだ、と。愛は聖餐であつて跪いて受くべきもの、受ける人の唇と心奥には、「主よ、われは高きものにあらず」の言葉がひびくべきものである。君もときにはそのことを考へたはうがよい。いや、ぜひさうすべきだ<sup>(2)</sup>。

状況は一変する。真摯な改悛の姿勢はワイルド本人のものといふより、むしろ、贅沢し放題の揚句ワイルドに冷淡になつてしまつた同性愛の相手にたいしてワイルドが、みづからをクリストに擬しつゝ、恩を忘れるな、悔改めよ、と教誡してゐるのである。簡略版『獄中記』では、文章の主語や語りかけの相手が「君」からほかのものに、例へば「万人」に、ロバート・ロスによつて書き替へられたために、「君」にたいする説教が「万人」にたいする説教に変容し、改悛したワイルドが「万人」の前に聖人として聳え立つ趣さへある。しかし、完本『獄中記』のワイルドは、その才気で読む者を幻惑す

ることはあつても、もはや改悛と篤い信仰で感動を与へることはあるまい。少くともわたくしは、ワイルドの大音声が朗々と響けば響くほど、無性に空しい思ひにとらはれる。

すでに一九二七年に亡くなつてゐる芥川はもちろん完本『獄中記』を読む機会はなかつたが、一九六二年のルーパ・ハートII デイヴィス版を読めるわたくしたちは、芥川最後の作品のなかに、いはば扮飾されたワイルドのクリスト像を読むとき、ある種の落着きのわるさを感じざるを得ない。思へば、ロバート・ロスも人騒がせなことをしたものである。しかし、化粧を施されたワイルド像に、結果として足をすくはれた者はけつして芥川だけではなかつた<sup>(3)</sup>。

「西方の人」、「続西方の人」からいへば虚像のワイルドといふ夾雑物を取除き、あはせて芥川自身の記憶の変容も承認したとき、かへつて「人生に失敗した」(続2) 芥川の心中がわたくしたちに側々と迫つてくるのではないかと、わたくしには思はれる。

註(1) 以下、引用は『芥川龍之介全集』第十五卷(岩波書店、一九九七年一月)

による。「西方の人」からの引用は章節の番号のみ、「続西方の人」からの引用は「続」の後に章節の番号のみ表示する。

(2) 芥川は「聖霊」とあるべきところに「精霊」と書いてゐる場合もある。

(25) および(26)、(28) 参照。

(3) Oscar Wilde, *De Profundis* (Methuen, 1908), pp. 106-7.

なほ、引用の訳文は阿部知二訳『獄中記』(岩波文庫、昭和十年)、七

〇一七一頁。以下の『獄中記』からの引用は岩波文庫版の頁数のみ表示する。ただし、論述の都合上、いちいち断らずに、訳語その他を若干変更させてもらふことがある。

- (4) 聖書からの引用は文語訳による。
- (5) 『獄中記』、六八―九頁。
- (6) *The Oxford English Dictionary* による定義はつぎのとおりである。  
poetical justice : the ideal justice in distribution of rewards and punishments supposed to befit a poem or other work of imagination.  
justice : Exercise of authority or power in maintenance of right ; vindication of right by assignment of reward or punishment ; requital of desert.
- (7) 『獄中記』、六五頁。
- (8) 同書、五〇頁。
- (9) 同書、五一頁。
- (10) 同書、五二頁。
- (11) 同書、六四頁。
- (12) 同書、六七頁。
- (13) 同書、七四頁。
- (14) 同書、七二―三頁。
- (15) 同書、四八―九頁。
- (16) 同書、五四―五頁。
- (17) 同書、六七頁。

- (18) 「芥川『西方の人』の『ロマン主義者』について」、桃山学院大学『人文科学研究』第十七巻第一号、昭和五六年。

- (19) 『獄中記』、一二頁。

- (20) *The Letters of Oscar Wilde*, Rupert Hart-Davis (ed.) (Rupert Hart-Davis Ltd., 1962), p.484.

原文はつぎのとおりである。

Or if that phrase seems to you (be) a bitter one to hear, let us say that everyone is worthy of love, except he who thinks that he is. Love is a sacrament that should be taken kneeling, and *Domine, non sum dignus* should be on the lips and in the hearts of those who receive it. I wish you would sometimes think of that. You need it so much.

下線の部分が *De Profundis*, Robert Ross (ed.) では削除されてゐる部分である。ただし“you”の部分は“be”と書き替へられてゐる。なほ、細かなテキストの異同は註記しない。

- (21) 例へば、神近市子訳『深き底より（獄中記）』の「解説」（天佑社、『ワイルド全集』第五巻、大正九年）には、「此書の中に始終してゐる真生命に対する深い憧憬と、全人類の生活に対する率直な批判」といふ評言が見られる。また、拙論「ワイルド『獄中記』と西田幾多郎『善の研究』」、「跡見学園短期大学紀要』第三十二集、平成六年、参照。